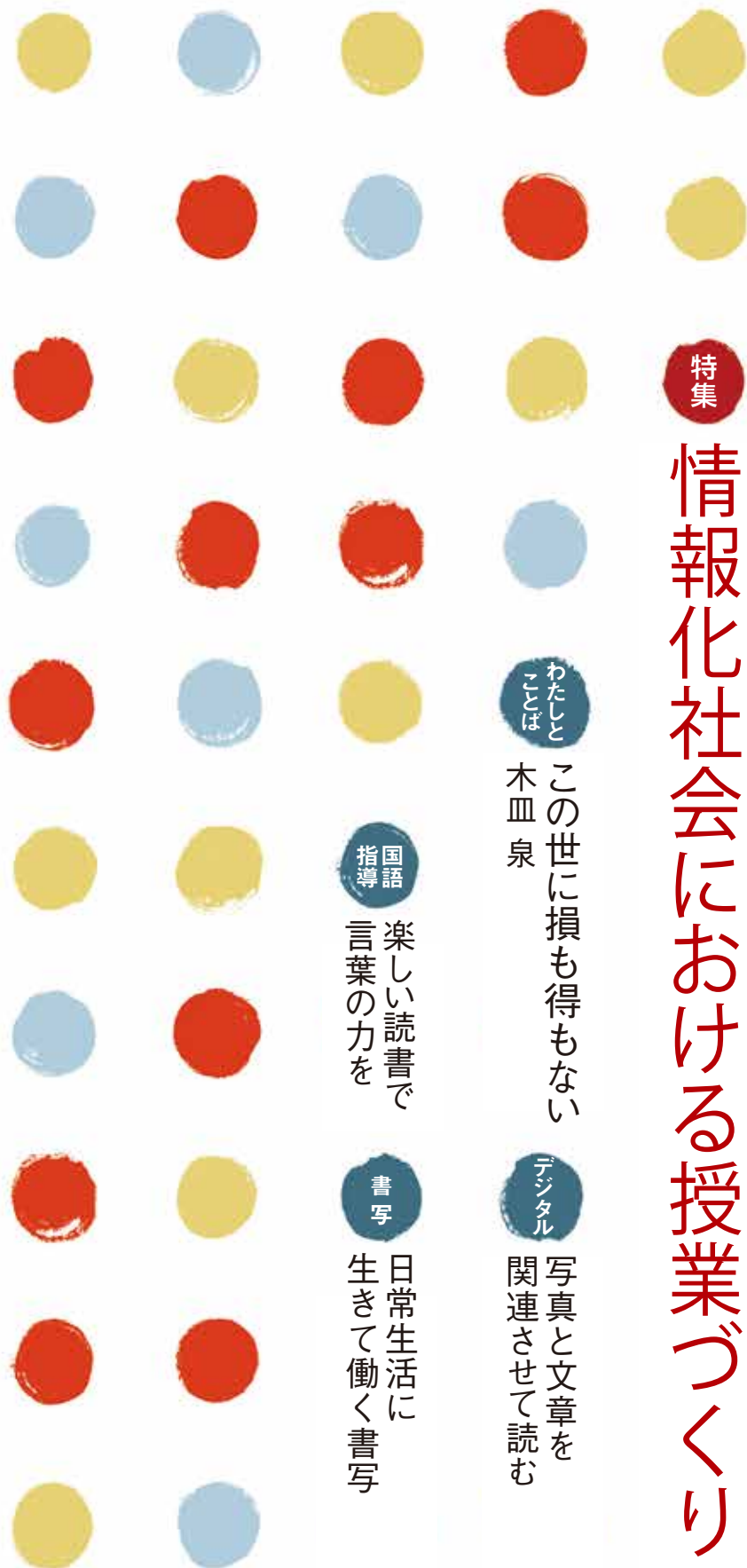




特集

情報化社会における授業づくり

わたしと
ことば

この世に損も得もない
木皿 泉

国語
指導

楽しい読書で
言葉の力を

書写

日常生活に
生きて働く書写

デジタル

写真と文章を
関連させて読む

2016, いっしょにはじめませんか。
これからの学び。



学びの限らない未来をひらく。
光村図書のデジタル教科書。

体験版はホームページよりダウンロードできます。
www.mitsumura-tosho.co.jp/digital/

小学校
指導者用

平成27年度版小学校教科書準拠

CoNETS 版
デジタル教科書

小学校
学習者用

「国語デジタル教科書」

光村「国語デジタル教科書」1～6年

DVD版 各72,000円＋税
ダウンロード版 各23,000円＋税

光村「書写デジタル教科書」1～6年

DVD版 各21,000円＋税
ダウンロード版 各7,000円＋税

光村「社会デジタル教科書」5年 6年

DVD版 各72,000円＋税
ダウンロード版 各23,000円＋税

光村「せいかつデジタル教科書」上下巻

DVD版 60,000円＋税
ダウンロード版 20,000円＋税

DVD版 使用期間は、平成27年度版教科書の使用期間内です。ダウンロード版 1年単位でのご使用も可能となりました。使用期間は、左記期間内の1年間です。

※指導者用デジタル教科書は学校フリーライセンスです。学校フリーライセンスとは、校内でご利用になる指導者用パソコンの台数を制限しない契約です。



ともに学ぶ授業に

伝え合う力が
身につく授業に

個に応じた授業に

ご好評をいただいている指導者用と共に、
平成27年度版として現在開発中!!

商品の情報につきましてはホームページにて
随時公開予定です。



光村図書

小学校 国語教育相談室 通巻No.169 2016(平成28)年1月29日発行

発行人=小泉 茂 発行所=光村図書出版株式会社 東京都品川区上大崎 2-19-9 〒141-8675 電話 03-3493-2111

www.mitsumura-tosho.co.jp E-mail:koho@mitsumura-tosho.co.jp 印刷所=協和オフセット印刷株式会社 デザイン=mg-okada

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」に則り、適切な管理・保護に努めてまいります。
詳しくは、光村図書ウェブサイトをご覧ください。 www.mitsumura-tosho.co.jp 広報誌の配送停止をご希望の方は、光村図書出版までご連絡ください。

この世に 損も得もない

私は親から説教されたことがない。昔の大人は忙しかったので、いつも放っておかれたからである。しかし、妹とケンカしたり、お使いに行くのをぐずったりすると、必ず言われるコトバがあった。それは、「損も得もない」である。

私は三人兄妹の真ん中だった。我慢するのは、いつも姉である私で、一番美味しい物は長男である兄の方へもってゆかれる。なにか納得できないと思っていたのだろう。私だけが損をしていると母に訴えると、「この世に損も得もない」と怒られた。

最初は理不尽なことを言うなあと思っていたが、よくよく考えてみれば本当にそうかもしれないと思えてきた。兄は小さい時、チョコレートを欲しがると、そのまま食べさせられて、気持ちが悪くなり、その後、

チョコレートを食べられなくなってしまった。一見、得に見えることも長い目で見ると、それが損か得かなんてよくわからない。つきつめれば、たいていのことは、死に際になってみると、「まっ、どっちでもいいか」ということになるのではないだろうか。

街は商品があふれて、お金は万能になってゆく。お金だけが人間関係をつないでいたりすることもある。損か得かを瞬時に判断できる人は賢い人だと思われる。今だけ半額、と言われると、自分だけが損をするのではないかと体が前のめりになる。みんなが目の前の損得で一喜一憂している。子供の頃、読んだ本の中では、そういう人たちは、たいてい痛い目にあっていた。花咲かじいさんの隣のおじいさんのように。みんな、そんな話を忘れてしまったのだろうか。

一度、損を引き受けてみるというのは、どうだろう。人からはバカにされるかもしれないけれど、世間の物差しでははかれない価値観が見えてくるかもしれない。そういうものが、まだこの世にあると知るのは、人生にとっては、得なことである。



撮影：原田奈々

夫婦で共同執筆の脚本家・小説家。ともに兵庫県生まれ。主に夫がネタを探し、妻が執筆するという役割分担。ドラマ作品に「やっぱ猫が好き」(第2シーズン1990～1991年、スペシャル版2005年)、「すいか」(2003年)、「Q10」(2010年)、自身の小説を原作とした「昨夜のカレー、明日のパン」(2014年)など。著書に、『木皿食堂2 6粒と半分のお米』(双葉社)など。

CONTENTS

わたしとことば この世に損も得もない ————— 木皿 泉

特集 02 情報化社会における 授業づくり

提言 主体的・協働的に情報を扱う ————— 中川一史

新設 情報コラム

インタビュー 想像力のスイッチを入れよう ————— 下村健一

デジタル教科書を使いこなそう 5 12 写真と文章を関連させて読み、読み広げにつなげる ————— 佐藤幸江

子どもたちを「書写好き」に 6 16 日常生活に生きて働く書写 ————— 藤井浩治

なるほど国語指導 5 20 楽しい読書で言葉の力を ————— 作・画／あべかよこ
監修／興水かおり

『小学校国語 授業に役立つワークシート集 6年』訂正のお知らせ

特

集

情報化社会における 授業づくり

情報化が進み、先が見通しにくい社会で、国語の授業に求められる視点とはどんなことでしょうか。

中川一史先生（放送大学教授と、五年「想像力のスイッチを入れよう」の筆者・下村健一さん（ジャーナリスト）のお話を通して考えます。

撮影：鈴木俊介

提

言

主体的・協働的に情報を扱う

放送大学教授 中川一史^{なかがわひとし}

情報の理解・表現と メディア・リテラシー

社会の情報化・グローバル化が進展し、先を見通しにくくなっているこの時代。そこに生きるために必要となる資質・能力を育むため、今、主体的・協働的に課題を解決していく学習のあり方（「アクティブ・ラーニング」）が求められています。なかでも国語では、その課題解決の過程で、目的に応じて、必要な情報をいかに効率的に収集し、的確に加工・整理し、効果的に表現していくかが大事になってきます。ただ、あふれる情報の中で、自分に必要な情報を見極めることは、たやすいことではありません。

そこで、私が提案したいのは、次の二つの視点です。これらを主体的・協働的に学んでいくことが肝要だと考えます。

① 情報やメディアの特性を踏まえた理解・表現の活動

② メディア・リテラシー

言語活動で自ら経験

とりわけ、①に関していうと、これまで国語では、ひと続きの文章を理解・表現することに重きが置かれる傾向があったように思います。しかし今や、課題解決の過程で対象とすべき情報はそれにとどまらず、絵・写真・図・グラフなど多岐にわたります。これまで授業で大きく取り扱われることが少なかった、文章以外のこうした情報の理解・表現について、これからの国語の授業では、いっそう積極的に学習していく必要があるといえます。

今回は、そうした視点から、教科書に位置づけられている学習の場についてご紹介していきます。

①・②を意識するときにはまず考えたいのは、情報を収集・選択し、自分の考えや表現に生かす言語活動を取り入れるということです。教科書では、子どもたちの発達段階や学習の習熟度などを考慮し、そうし

た言語活動を系統的に位置づけています。例えば、四年上「だれもが関わり合えるように」（「話すこと・聞くこと」）。この単元では、「調査の報告をしたり、それらを聞いて意見を述べたりする」という言語活動が設定されています。子どもたちは、自分の関心に沿った課題について調べ、分かったことや気づいたことを発表します。ここで彼らは、集めてきたさまざまな情報を分類・整理することで自分の考えを見いだしたり、自分の課題に照らして重要な情報を選び取ったりするを経験することになります。

いっぽう、六年「ようこそ、私たちの町へ」（「書くこと」）で言語活動として位置づけられているのは、「町のよさを多くの人に伝えるための文章を書き、編集する」ことです。相手や目的に応じて、文字だけではなく、写真や絵・図なども使って、みんなで吟味しながら効果的に伝えることを経験します。ここでは、文字・写真・絵・図それぞれの特性について、これまで学んでき

たことが役立ちます。このことは、特性を踏まえ、たうで情報を理解し、表現に生かすことにつながっていくでしょう。

このような言語活動を自ら経験することを通して、子どもたちが情報の理解・表現について学んでいけるように教科書は構成されているのです（下表参照）。こうした言語活動を展開する際には、活動の手順をただ追うのではなく、「実生活の中で使えるように」という視点をもつことが、子どもたちの学びをより深く導くことになると思います。

知識の整理・活用

ある言語活動を通して経験的に知ったことを、他の学習場面や生活で使いこなすには、それを知識として理解したり、一般化したたりする必要があります。教科書では、三年以上の各学年で、単元末に適宜、「情報コラム」という系列が新設されました。ここでは、知識を整理したり、単元で扱いきれない新しい視点を示したりしています。情報コラムには、情報を読み解いたり、自分の表現に効果的に活用したりするときの要点が整理され、学習場面に即して示されています。例えば、三年下「すがたをか

える大豆」は、言葉だけでは分かりにくい

部分に写真が添えられた説明文です。読み進めるにあたっては、文章と写真を合わせて読んでいくことになります。この教材の後に置かれた情報コラム「絵や写真を使ってせつめいする」では、絵・写真を使って説明する意味やよさが解説されています。

ここでしっかりと確認した知識は、この後に続く教材「食べ物のひみつを教えます」で、説明の文章を書くときにも生かすことができます。もちろん、関連のある教材は他にもさまざまあるので、機を捉えて立ち戻るという使い方もできるでしょう。

実は、教科書に掲載されている他にも、押さえておきたい細かな知識はたくさんあります。それらについては、学習指導書『情報・メディアに着目した授業をつくる』に、教師向けのコラムとして収録されています。こちらにも必要に応じて活用することができそうです。

「実生活の中で使えるように」という視点をもって。



なかがわひとし
中川一史
北海道生まれ。横浜市内の公立小学校教諭、横浜市教育委員会、金沢大学助教授、メディア開発センター教授を経て、2009年より放送大学教授。主な研究テーマは、国語科における映像メディアの理解と表現、デジタル教科書の活用など。著書に、『タブレット端末で実現する協働的な学び』（共著／フォーラム・A）など多数。光村図書 小学校「国語」教科書編集委員。

「読むこと」を通つて

「読むこと」の中でも、特に説明文の学習は、①・②を学ぶのにより機会であるといえます。教科書には、先ほど挙げた「すがたをかえる大豆」のように、文章と、文章以外の情報（写真や絵・図など）を合わせて読む説明文が、適宜配置されています。それに加えて、テーマ・題材そのものを

①・②と関連させた説明文が位置づけられていることも、注目すべき点です。例えば、四年下「アップとルーズで伝える」では、テレビの映像技法について取り上げ、情報が取捨選択されて伝えられていることが説明されています。それから、五年「想像力のスイッチを入れよう」では、メディアからの情報を正確に受け止めるために必要な努力についての筆者の考えが、事例とともに述べられています。

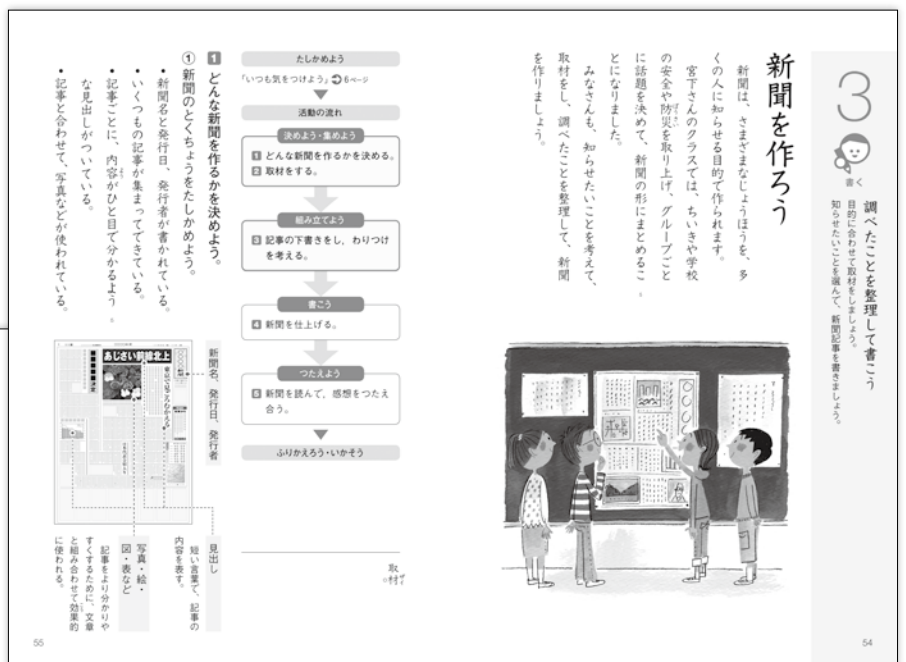
いずれも、情報の理解と表現のしかたに関する自覚を促し、メディア・リテラシーを学ぶ導入ともなる内容といえるでしょう。これらの単元では、文章や筆者の意図を正確に読み取ることに加え、ぜひ、説明されている題材・テーマにも立ち止まり、子どもたちと確認したり考えたりしてみることがお勧めします。

ご紹介してきたように、教科書には、情報やメディアの特性を踏まえた理解・表現、メディア・リテラシーを意識した学習の場が、学習の必然性に即して随所に位置づけられています。指導の際には、こうした観点も意識し、子どもたちに主体的・協働的に情報を扱う力がつくような授業展開や手立てなどを検討していただけたらと思います。（談）

▼情報の理解と表現に関わる学習活動の段階表（○は学習活動、■は教材名）

情報の理解	情報の表現
○絵や写真と文章を対応させて読む ○順序に気をつけて読む ○知っていることとつなげて読む など	○話す順序や事柄に合わせ、実物や絵、写真を指し示しながら話す ○絵を描いて報告・説明する文章を書く ○写真や絵を用いて、記録する文章を書く など
1・2年 ■1年 上巻「くちばし」「うみの かくれんぼ」／下巻「じどう車くらべ」 など ■2年 上巻「たんぼぼの ちえ」／下巻「しかけカードの作り方」 など	■1年 上巻「おおきく なった」「なつやすみの ことを はなそう」／下巻「しらせたいな、見せたいな」「いい こと いっぱい、一年生」 など ■2年 上巻「かんざつ名人に なろう」／下巻「お話のさくしゃになろう」「おもちゃの作り方」「あったらいいな、こんなもの」 など
○絵や写真、図表と文章の組み合わせの効果について理解する ○まとまりを捉えて読む ○文章の組み立てに注意して読む など	○内容に合わせて、実物・絵・写真・図表などの資料を使って理由を挙げて説明する ○テーマに合った写真や図表を選択し、報告・説明する文章を書く など
3・4年 ■3年 上巻「気になる記号」／下巻「すがたをかえる大豆」「しりょうから分かる、小学生のこと」 など ■4年 下巻「アップとルーズで伝える」「ウナギのなぞを追って」 など	■3年 上巻「気になる記号」／下巻「食べ物のひみつを教えます」「しりょうから分かる、小学生のこと」 など ■4年 上巻「新聞を作ろう」「だれもが関わり合えるように」／下巻「クラブ活動リーフレットを作ろう」 など
○情報の送り手の意図を吟味する ○絵などと文章の補完の効果を理解する ○筆者の考えの根拠となる事例、各段落の役割について考える など	○図やグラフを示しながら根拠を挙げて説得する ○さまざまな資料から、テーマに合ったグラフや表を引用して、報告・説明する文章を書く など
5・6年 ■5年 「新聞を読もう」「天気を予想する」「想像力のスイッチを入れよう」 など ■6年 「時計の時間と心の時間」「鳥獣戯画」を読む「この絵、私はこう見る」 など	■5年 「グラフや表を用いて書こう」「すいせんします」 など ■6年 「ようこそ、私たちの町へ」「今、私は、ぼくは」 など

「新聞を作ろう」(4年上)



▲4年上P54・55 単元冒頭

4年上「新聞を作ろう」には、「学級新聞を作る」という言語活動が位置づけられています。新聞の特徴と作り方を知り、取材をもとにして記事にすることを決める。それから、伝えたいことが明確になるようにして文章を書き、割り付けを考えて新聞を仕上げる。言語活動を通して、これらの学習が展開されます。

情報コラムは、子どもたちが情報やメディアを読み解いたり、自分の表現に効果的に活用したりするための知識整理の場。三年以上の各学年において、「情報の理解」と「情報の表現」という二つの観点それぞれについて一か所ずつ新設されました。本コラムは、適宜、単元末に位置づけられ、その単元の学習活動に関連した知識を整理したり、単元で扱いきれない新しい視点を示したりしています。

単元の言語活動中はもちろん、言語活動に入る前、言語活動を終えた後などにこのコラムを使って、新たな知識やこれまでの経験を押さえることができます。

ここでは、四年上「新聞を作ろう」とその単元末に置かれた情報コラム「新聞にのせる写真や図などを選ぶときには」を取り上げ、単元での学習と情報コラムとのつながりの例をご紹介します。

情報コラム

▲4年上P63

「新聞にのせる写真や図などを選ぶときには」

集めた情報を整理して記事を仕上げる際には、文章に加え、写真や図なども目的に応じて取捨選択する必要があります。情報コラムでは、写真や図などの情報の特性、取捨選択の観点を示しています。ぜひ、単元の学習の中でご活用ください。



▲4年上P60・61 新聞の割り付け・仕上げ

⑤ 新聞を仕上げよう。

たがいの下書きを読んで、意見を出し合います。記事にまちがいがなければ、たしかめ、ていねいな字で清書します。清書した紙をはり合わせると、完成です。

完成



清書

修正

修正

新聞にのせる写真や図などを選ぶときには

新聞にのせる写真・絵・図・表などは、文章との関係をよく考えて選びましょう。

● 伝えたい内容と目的に合っているかどうかをたしかめる。

ちいきの災害たいさくについてつたえる記事に、地図をそえるとしたら、あなたはどんな地図にしますか。災害のときに役立つかもしれない、あらゆる場所をよりこんだ地図でしょうか。それとも、ひなん場所にしぼってしめた地図でしょうか。

写真や図などを使うときは、伝えたい内容と目的に合ったものを用意するようにしましょう。

10

5

● その写真や図などでしかつたえられないことは何かを考える。

学校のそばで見つけためずらしい草花を、新聞でしようかいます。その草花について、言葉で説明するよりも、一まいの写真があれば、その草花の色や形、大きさ、生えている場所などがよく分かります。しかし、名前や、さわった感じ、においなど、言葉でなければつたえられないこともあります。何を写真や図などでつたえ、何を言葉でつたえるのかということを考えて、新聞を作りましょう。

10

5

■学習指導書のご紹介

学習指導書『情報・メディアに着目した授業をつくる』(監修：中川一史)では、情報を読み取ったり、効果的に表現したりする力を育てる授業を、理論と実践の両面から解説しています。情報モラルなどを扱ったコラムも充実しています。ぜひ、教科書と合わせてご活用ください。

情報・メディアに着目した授業をつくる
(1～6年全1冊/本体3,500円+税)



▼各学年に位置づけられた情報コラム

情報の理解	3年下	「絵や写真を使ってせつめいする」
	4年下	「言葉で変わる写真の印象」
	5年	「グラフや表を読む」
	6年	「絵画や写真を見るときには」
情報の表現	3年下	「見せながら話するときには」
	4年上	「新聞にのせる写真や図などを選ぶときには」
	5年	「直接対面しない相手とのやり取りでは」
	6年	「効果的な資料を提示する」



想像力のスイッチを入れよう

ジャーナリスト 下村健一

「想像力のスイッチを入れよう」(五年)は、新教材の説明文。筆者は、ジャーナリストの下村健一さんです。報道アナウンサーとして、長くマスメディアで情報を伝えてきた下村さんに、この文章の意図、子どもたちにメディア・リテラシーについて教える際のポイントをお聞きしました。

「想像力のスイッチ」

——タイトルにある「想像力のスイッチ」という言葉は、文章中で繰り返し使われるキーワードですね。

ええ。この文章では、情報を受け止めるときに大切にしてほしい四つの「想像力のスイッチ」を挙げています。つまり、①『事実かな、印象かな。』、②『他の見方もないかな。』、③『何がかくれているかな。』、④『まだ分からないよね。』の四つです。これは、四半世紀にわたる、報道の世界での僕

の体感から生まれたもの。情報の真偽を見極めるには、それなりの予備知識がなければ無理だとも思いますが、そんなことはない。知識がなくても、この四つのスイッチが分かっているだけで、少なくとも情報をうのみにすることは避けられます。

ただ一方で、常時このスイッチをオンにして情報を精査していたら、きつと、へとへとになってしまう。だから、「これって、どうなんだろう?」と思ったときだけに、自分で考えるように頭を起動すればいいんです。必要なときに、オフからオンに切り

替える。そういうイメージで、「スイッチ」という言葉を僕は使っています。

——下村さんは、小・中学生を対象にメディア・リテラシーの授業をされることもよくあるそうですね。子どもたちからたびたび出る質問には、どんなものがありますか。

いちばん多いのは、「いったい、いつまで『まだ分からないよね。』と考え続けられるのか」という質問ですね。それでは最終判断ができないじゃないか、と。それに対しては、こう答えています。

「ずっと白紙のままでもいいっていうことじゃないんだ。『今日のところはこう思う』っていう、今日の判断はしていいんだよ。」

大切なのは、今日の自分の見方によって、明日の自分の見方を縛らないこと。先人観で新しい情報を排除せず、日々柔軟に見方を変えていっていい。四つ目のスイッチ『まだ分からないよね。』というのは、そういう意味なんです。それが分かると、子どもたちは安心した表情を見せてくれますよ。——『まだ分からないよね。』は、判断を固定しない姿勢を指しているのですね。

そう、窓を閉じず保留せよ、と。その意味では、④『まだ分からないよね。』は、四つのスイッチの中ではちょっと異質といえます。他の三つ、つまり、①『事実かな、印象かな。』、②『他の見方もないかな。』、③『何がかくれているかな。』は、情報を吟味するときの具体的観点ですから。

文章中でも、「いちばん大切なのは」と

強調して、〃真打ち〃として④を最後に挙げました。実際には④は、①②③それぞれの観点で考え始めるときにも、必ず頭の中をよぎっている言葉なんですよ。最後に置いたのは、『完』ではなく『続く』だよ、という僕のメッセージです。この文章をもとにメディア・リテラシーについて学習するときには、④を、常に意識する基本姿勢として捉えてもらえたらと思います。

メディアの側の努力

——この説明文は、子どもたちがメディア・リテラシーを学ぶきっかけになりそうですね。

そうなってくれたらいいなと思います。ただ、危惧していることもあるんです。それは、この文章を少し捉え違った子どもたちが、「メディアは全て疑え」と全否定に向かってしまうのではないかということ。これは情報をうのみにする、つまりメディ

アを無批判に全肯定することの対極にあるように、実はまったく同じ態度の裏表だといえます。メディア・リテラシーは、自分の頭で考えて判断できる人を育てるためのもの。考えずに全否定する人を生み出してしまったら、なんの意味もありません。これは、強烈に大事な点だと思っています。だから文章では、「メディアもたまそうとたくらんでいるわけではない」ということも伝えたいと思いました。メディアの側も努力をしている。でも、それでも情報を受け取る側との間にコミュニケーション不全が生じてしまうことがある。それを防ぐために、情報を受け取る側も努力する必要があるのだということ。それを伝えようとしたのが最後から二段落目です。メディアの側にいた僕が説くメディア・リテラシーの特徴が表れた部分ともいえるかもしれません。

「メディアは皆、うそつきだから信じるな」という狭い結論に向かってしまわない



先生方へのメッセージ

——この文章で、これから授業をされる先生方へのメッセージをお願いします。

小さい窓から小さい景色を眺めるのではなく、大きな景色を眺める楽しさを味わってほしい。これは、文章の最後にも書いたことです。子どもたちには、全体像を見渡す想像力をもってもらいたいのです。そのためにも、授業の際にはぜひ、単なる「文章の読解」にとどまらず、題材となっているメディア・リテラシーそれ自体への理解も深めてもらえたらいいなと願っています。

「四つのスイッチを働かせるようになってから、メディアの見方が、そして世界の見方がちよつと変わった」。これを学んだ子どもたちに、いつかそう言ってもらえたら、こんなに幸せなことはありません。

ように、子どもたちには、この部分もぜひ大切に読んでもらえたらと思っています。

——「メディアの側の努力」という言葉がありました。具体的には、メディアの側はどんな努力をしているのでしょうか。

メディアの側は、中立・公正に近づくよう、より偏りなく、より正確に情報を発信すべきだし、実際、現場はその努力を続けています。具体的には、「明確さ」「正確さ」「優しさ」「易しさ」。この四つが、メディアの側に必要な努力と責任であると、僕は思います。詳細は、拙著『10代からの情報キヤッチボール入門』（岩波書店）で説明しているの、ここでは簡単に――。

「明確さ」は「何を伝えたいのか」をはっきりさせ、情報発信のしかた・内容・表現

大きな景色を眺める楽しさを ぜひ味わってもらいたい。



しもむら けんいち
下村健一

東京都生まれ。ジャーナリスト、市民メディア・アドバイザー。東京大学卒業後、TBSで現場リポーター、アナウンサーとして活躍。退社後はフリーキャスターの傍ら、市民によるメディア制作を支援する活動を開始。2010年から2年半、内閣審議官（満了後は契約アドバイザー）として民主・自民3首相の情報発信を担う。現在、慶應義塾大学特別招聘教授、関西大学特任教授、白鷗大学客員教授。

メディア・リテラシー 授業のポイント

小・中学生から大人まで、幅広い世代を対象に、メディア・リテラシーを教える授業をされている下村さんに、その授業のポイントをご紹介いただきました。

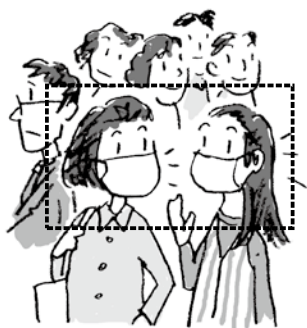
●「生の素材」を通して

メディア・リテラシーは、メディアと接しているそのときに、その現場で考えることといちばんよく身につきます。では、その「現場性」を学校で再現するにはどうしたらいいか。僕は、「生の素材」を取り入れることをお勧めしています。

生の素材とは、実際にメディアから発信されたニュースのこと。それらを教室に持ち込んで、みんなで「想像力のスイッチ」を入れる練習をするのです。教材に最適なニュースを予知して録画するのは困難ですが、自宅のテレビでいいシーンに出会ったら、それをスマホで撮って、静止画として子どもたちに見せるとか――。そんなことを少し意識するだけで、使える素材は集まるものです。

●知識の有無を問わずに

「想像力のスイッチ」を入れる練



習をするときに大切なのは、知識がなくても情報はある程度見極められる、と実感できること。ですから、教材には、予備知識がある子もない子も等しく理解できるようなニュースを選ぶ必要があります。

例えば、以前、三つ目のスイッチ『何がかくれているかな。』について説明するために僕が選んだのは、「韓国でのMERS^{マーズ}の感染拡大」を伝えるニュース映像の一場面。「感染拡大」のニュースだから、メディアは、警戒してマスクをしている人にスポットライトを当てて映し出す。で

も実は、その周りには、それ以上にたくさん、マスクをしていない人がいる。こうした教材なら、特別な知識はいらないし、実際に写真で人数を数えて確かめることもできます。

●身の回りの出来事から

子どもたちが実感をもちやすいよう、身の回りの出来事から素材を見つけるのもよい方法です。例えば、「二つ目のスイッチ『他の見方もないかな。』で使ったのはこんな例文。落ち込む友達の様子を見て来た子が、級友たちにそれを報告する場面。

・ほは笑んでくれたけど、目は赤かった。
・目は赤かったけど、ほは笑んでくれた。

両者は同じ内容ですが、情報発信者を選ぶ語順しだいで、受け手の印象はずいぶん変わります。こうした実例を使って「だから一つの情報で即断せず、他の見方もないか想像しようね」と説くと効果的です。

下村健一さんには、2014年にもお話を伺っています。
そのインタビュー記事は、小社ウェブサイトに掲載中です。こちらもぜひご覧ください。
光村図書ウェブサイト>小学校 国語>作者・筆者インタビュー>下村 健一



東京都生まれ。横浜国立大学大学院教育学研究科修了。横浜市内の公立小学校教諭、主幹教諭を経て、現職。専門分野は、教育工学（授業設計、情報教育）、教科教育法。共著書に『タブレット端末で表現する協働的な学び』（フォーラムA）など。

写真と文章を関連させて読み、読み広げにつなげる

今回は、読書単元「本は友達」を取り上げます。美しい写真と文章で構成された「里山は、未来の風景」（三年上）を、写真と文章を関連させながら読むことで、児童の読み広げへの意欲を高める実践をご紹介します。

1 読書単元「本は友達」

各学年一か所の読書単元「本は友達」では、児童が楽しく本と出会い、読書の世界を広げていけるよう、さまざまな観点から「本」や「読むこと」「読書」について考える場が設けられています。本を使って調べたり、本を薦めたり、自分と本、自分と読むこととの関わりを考えたりする学習活動と読み物教材が一体化され、効果的な読み広げが期待できるところとなっています。

実は先日、三年「本は友達」の授業をする機会に恵まれました。本単元は、二つの教材「本を使って調べよう」「里山

は、未来の風景」と、コラム「本の分類表」から成る単元。位置づけられている言語活動は「記録文や報告文、図鑑や事典などを利用して調べる」ことです。まず、「本を使って調べよう」で図書館の利用のしかた、本を使った調べもののしかたを学習した後、読み物教材「里山は、未来の風景」を読んでもっと知りたいことを見つけ、本を選んで調べるといった活動の流れが想定されています。

図鑑や事典、他の科学読み物などの読み広げへと導くためには、「もっと知りたい！」という児童の興味や関心を引き出すことが鍵となります。そこで、美しい写真とともにつづられたこの読み物教材を、デジタル教科書を使って、写真と

2 単元の指導目標

◎目的に応じて、いろいろな本や文章を選んで読むことができる。（読1カ）
◎いろいろな本や文章を読み、調べる対象についての語彙を増やすことができる。（伝国1イア）
《言語活動》記録文や報告文、図鑑や事典などを利用して調べる。

ない文には青線を引くようにします。

例えば、「広い田んぼの中に、点々と緑色の雑木林が見えます。」には赤線を引き、写真の雑木林のところに○印を付けて、それらを線で結びます。このとき、「写真を見ると、筆者の仕事場の周りに雑木林があることがよく分かりますね」と確認するようにしました。同様のことを繰り返すうちに、児童は、写真と関連させながら読むと、文章だけでは分からない詳しい情報を得ることができるのだと気づいていきます。

また、「しよくぶつやこん虫や鳥など、（中略）人もすんでいることが分かります。」という文には青線を引き、これについてもっと知りたいときには、文章を読み進めるか、図書館にある図鑑などで調べる必要があることを確認しました。

このように、これからの学習の方向づけをする際に、デジタル教科書が大活躍しました。なお、本時のデジタル教科書の履歴は次時でも使用するので、保存しておきます。

■第四時の授業展開

本時では、前時の学習を生かして、自分の教科書に線を引いたり印を付けたりしながら、一人読みをします。「里山の

3 単元の指導計画（全六時間）

▼第一時

図書館の利用方法を確認、学習の見通しをもつ。

▼第二時

図鑑や百科事典などの特徴や使い方を知る。

▼第三～五時

「里山は、未来の風景」を読み、文章と写真を関連させながら読むことよさを理解したり、もっと知りたいと思ったことをノートに書き出したる。

ここで活用！

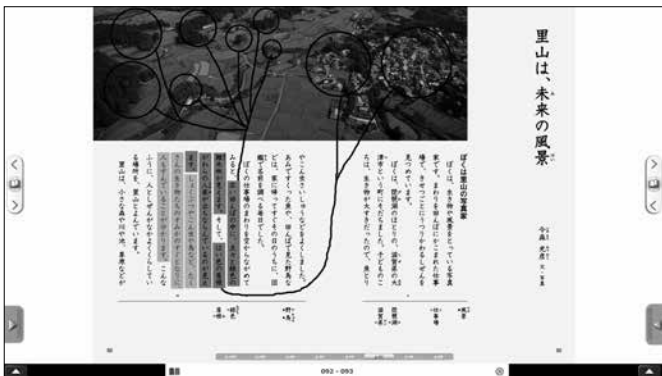
▼第六時

学校図書館で本を使って調べたり、学んだことをどのようなときに生かしたいか考えたりする。

4 活用のポイント

■第三時の授業展開

本時は、第三～五時の一連の学習の最初の時間です。指導計画に即して、文章と写真を関連させながら読むことで、文



▲写真の○印と文章の赤線を関連させたり、青線を引いたりしたデジタル教科書の画面。

田んぼ「里山の水辺」「里山の雑木林」「里山はしぜんのおくり物」のまとまりの中から一つを選び、文章と写真を関連させながら読んだ後、デジタル教科書を使って発表し、クラス全体で共有するようにします。その様子を詳しくご紹介します。

【読み方を振り返る】

読む前に、デジタル教科書で前時の学習履歴を提示し、写真の中に関連する内容がある部分には赤線を、写真には関連する内容がない部分には青線を引きながら読むことを確認します。履歴の提示は、これまでなら手書きの模造紙などを使わなければなりませんでしたが、デジタル教科書を使えば、前時に保存した学びの足跡をそのまま示すことができます。

教科書へのかき込みを嫌がる児童には、教科書紙面をコピーしたものを用意しておくといでしょう。

【文章と写真を関連させながら読む】

例えば、「里山の田んぼ」のまとまりでは、「棚田」「山を切り開く」「曲線をえがく」「あぜ道」「生き物」などがキーワードになります。机間指導では、児童がそれらのキーワードに、どのように線を引いているかを確認していきます。

大切なのです。このように、写真と文章を行ったり来たりすることで、そこに示された事実をつかむだけでなく、「次はこんなことを調べてみたい」という児童の意欲を喚起することにもつながりました。

【まとめ】

「写真を見ると、文章だけでは分からない『物の形、色、散らばり方などの様子』を知ることができる」とまとめ、次時では、「里山の雑木林」「里山はしぜんのおくり物」のまとまりについて読んでいくことを伝えました。「ここを担当していても、読んでみたい人は読み進めておいていいですよ」と伝えておくことで、児童の関心や意欲をより高めることにもつながるでしょう。

■第五時の授業展開

デジタル教科書で学習履歴を提示して前時の振り返りをした後、「里山の雑木林」「里山はしぜんのおくり物」のまとまりについて全体で共有しました。担当ではないのに、ここを読んできたという児童がいる場合には、大いに褒めるようにしましょう。

これらの文章の中には、「クスギ」や

「棚田」「山を切り開く」「曲線をえがく」は、写真を見ることでより詳しく様子が分かるので、赤線が引かれる部分ですが、なかには青線を引く児童もいます。そのようなときは、児童が青線を引いた理由も確認しておくことが大事です。

このときは、「山を切り開く」に青線を引いた児童から「どうやって山を切り開いたのか分からない」という言葉が出てきました。これは読み広げに目を向けさせるチャンスです。私はすかさず、「そうだね。そうしたら、それを自分で調べるといいんだよね」と声をかけました。こうして拾っておいた児童の言葉は、この後クラス全体で立ち止まって考えさせたいときに使うこともできます。

大体の児童が読み終えた頃に、同じ内容を読んだ者どうしでペアになって交流させます。

【叙述に即し、線を引いた理由を考える】

その後「里山の田んぼ」「里山の水辺」のまとまりについて、デジタル教科書を利用して全体で共有します。ペアの二人で、線を引いたり印を付けたりしながら分かったことを発表させます。このとき、赤線を引く係、それについて説明する係というように、各自に役割をもたせると

よいでしょう。そして、青線を引く際にその役割を交代させれば、みんなに発表の機会を与えることができます。

ここでは、前述した、机間指導の際の「山を切り開く」についての児童の言葉を、全体に投げかけてみました。ペアで交流した後、この児童のペアでは、青線から赤線に考えが変わってしまっていたからです。なぜ考えを変えたのか、まずその理由を聞くと、「（デジタル教科書の写真の山のところを指し示して）周りには山があるので、ここを崩して田んぼにした」ということは分かるから、赤線にしました」ということでした。

この部分をしっかりと読んでいない児童もいるので、全員で声に出して読み、考えることにしました。何人かの児童が、デジタル教科書の写真を指し示したり、それを拡大したりしながら自分の考えを次々に話していきます。そして、最後には「山を切り開いて田んぼができたという事実は写真を見れば分かるけれど、誰がどういう方法で切り開いたかまでは分からない」ということで、みんなで納得しました。

単に、赤線を引いたのか、青線を引いたのが大事なのではなく、なぜそうしたのかを、叙述に即して話し合うことが

「ニホンジカ」などの生き物の名前、「二十年」という期間を表す言葉が出てきます。そこで、写真と対比させながら、「文字」や「数字」で表すことのよさを押さえるようにしました。また、「せっかく育てた雑木林をなぜ切ってしまうのか」という新たな疑問も、文章をしっかり読むことで分かってくることも確認しました。

本時の後半では、これまでの学習履歴を俯瞰しました。すると、児童は、赤線も青線も引かれていない部分があること



▲デジタル教科書では、授業中にかき込みを入れた画面を保存し、後で「履歴一覧」から開くことができる。

5 実践から分かること

本実践では、文章と写真を関連させる手立てとして、線を引いたり印を付けたりするというデジタル教科書の機能を活用しました。これにより、児童は、文章と写真を関連させながら読むことで、文章だけでは分からない、より詳しい情報を得られることに気づきました。また、その活動の中から児童の言葉を拾い、全体に投げかけて考えさせることで、「もっと調べてみたい」と、児童の意欲が高まる様子が見られました。

授業のアイデアをもちながら、手間や時間を考えてためらっている先生も多いのではないのでしょうか。デジタル教科書を活用すれば、それを実現できるかもしれません。ぜひ、考えてみてください。

教科での学習が日常に生きる。これは、その教科の存在意義ともいえる重要なことです。とりわけ、文字を書くという行為は、あらゆる日常場面において必要不可欠なもの。今回は、日常生活に生きて働くことを意識した書写の授業について考えてみたいと思います。

広島県生まれ。2008年度まで広島県尾道市立土堂小学校に勤務。陰山英男校長在籍の3年間、教務主任として土堂改革に取り組み、数々の成果を上げる。光村図書 小学校・中学校「書写」教科書編集委員を務める。



日常に生きる書写の授業で大切にしたいポイントが二つあります。一つは、毛筆と硬筆を関連させた指導。そして、もう一つは、相手を意識した「伝える工夫」に関わる指導です。それぞれの指導の工夫について紹介します。

毛筆と硬筆の関連

(1) 文字を整えて書く原則の応用
毛筆を使用した書写指導のねらいについて、学習指導要領では「毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導し、文字を正しく整

えて書くことができるようにする」(傍線は筆者)と示されています。子どもたちが日常生活を送るうえでより必要とされるのは、硬筆で正しく整えて書く力。ですから、毛筆での学習で身につけたその力が硬筆に生きるよう、指導を工夫することが大切です。
では、四年「部分の組み立て方(上下)」(教科書P18・19)を例にとって具体的に説明しましょう。
「かんむり」を整えて書くとき、「雨」と「あめかんむり」を比較して考えると、次の四つの原則があることに気がつきます。



図1

- ① 上下の高さを詰めて、形を平たくする(図1)
- ② 縦画の方向を変える(図2)
- ③ 「折れ」を「払い」に変える(図3)
- ④ 「かんむり」の下部をそろえる(図4)

いっぽう、小学校で学習する漢字のうち、「あめかんむり」をもつものは三字です。それから、「たけかんむり」「あなかんむり」をもつ漢字、「うかんむり」「わかんむり」の仲間の漢字は、全部合わせて五十八字あります。

例えば、この四つの原則は、「たけかんむり」にも当てはまります(図5)。それから、原則①②は、「あなかんむり」「うかんむり」の仲間・「わかんむり」の仲間(図6)にも当てはまります。「雲」で学んだ原則は、「雲」以外の「あめかんむり」の漢字を書くときにはもちろんのこと、他の「かんむり」を書くときにも応用することができるのです。



図2

図3

図4



図5



図6

もし、この書写の授業が、「『雨雲』という教材文字を毛筆で書く」という学習だけで終わってしまったらどうでしょう。その授業で、子どもたちは、「雲」という文字を整えて書く力」だけを身につけたことにしかりません。しかし、せっかく学習した「あめかんむり」を整えて書くための原則を、他の文字を書くときに生かさずに終わるのは、非常にもったいないことです。

「あめかんむり」 雪 雲 電	「たけかんむり」 算 答 第 笛 等 箱 筆 管 笑 節 築 簡 筋 策	「あなかんむり」 空 究 窓	「うかんむり」の仲間 字 家 室 安 寒 客 宮 実 守 宿 定 案 害 完 官 察 寄 富 容 宇 憲 宗 宣 宅 宙 宝 密	「わかんむり」の仲間 学 売 写 受 軍 愛 栄 覚 賞 堂 労 営 常 党
-------------------	--	-------------------	--	--

つまり、「雲」を通して学習したことを、「雲」や「あめかんむり」をもつ漢字だけにとどめずに他に生かせば、これほど多くの文字を整えて書くことができるようになるのです。限られた授業時間の中、五十八字の文字全てを教材文字とし、その一字一字を毛筆で学習していくことは不可能に近いと思います。それを考えると、学習した原則を他の文字に生かすことの重要性を実感することができているのではないのでしょうか。

ですから、「雨雲」を毛筆で大きく書く学習によって見つけた原則を、硬筆で書いて定着させる際には、その原則を他の文字に応用させるということも、授業に取り入れたいものです。これにより、原則の定着と日常化を目ざします。

(2) 自分で探した文字を硬筆で書く

原則を他の文字に応用させるときの工夫として、「原則を応用させることができそうな文字を探す」という方法が考えられます。自分が知っている文字の中から、原則を生かせそうなものを子どもたち自身が探すのです。こうした学習活動は、子どもたちの文字への興味・関心を大いにかき立てます。

教科書巻末には、「当該学年で学習す

る漢字」の一覧表が掲載されています。この一覧表の中から、原則を応用できる漢字を探す、という学習活動を設定してみてください。時期によっては、当該学年の一覧表内に未習漢字が多く、漢字を探すが難しい場合もあるかもしれません。その際は、同じく巻末に掲載されている、「前学年で学習した漢字」の一覧表が使えます。これまでに学習してきた漢字の中から、子どもたち自らが探した漢字を取り上げ、その文字を硬筆で練習させることで、整えて書くための原則がより身につきます。

(3) 他教科の学習と関連させる

毛筆に比べ、硬筆での学習にはそれほど時間がかかりません。硬筆は、短時間で多くの文字を書くことができるので、原則を定着させるための学習活動に適しているといえます。とはいえ、書写の時間に硬筆で書くだけで、原則が確実に定着するかといえば、そうではありません。国語をはじめとした書写以外のさまざまな学習の時間でも、書写で学習した原則を生かす場を作っていくことで、日常化が促されます。

例えば、国語の時間。新出漢字をノートに書いて、練習してくるという宿題を

出すとします。このとき、「『かんむり』をもつ漢字を書くときには、『かんむり』を書くときの原則を意識するようにしましょう」と、子どもたちに声をかけ、意識づけるようにすることが大切です。さらに、提出された宿題を確認するときには、原則を意識して書くことができている漢字に、丸を付けるなどして評価するとよいでしょう。こうした日々の指導の積み重ねが、書写での学習の定着・日常化につながっていきます。

(4) 書く速さ・漢字仮名交じり文

さて、硬筆を使用して、原則を定着させるときに、留意したいポイントが二つあります。

一つ目のポイントは、「書く速さ」です。書写の時間に硬筆で文字を書くとき、子どもたちは、正しく整った文字になるよう丁寧に、時には必要以上に時間をかけて書こうとすることが多いはず。しかし、日常、文字を書く場面ではほとんど時間をかけることは、ほとんどないといっていけるくらいです。ですから、このままでは、書写の学習と日常で文字を書く場面とに大きな開きが生まれることになってしまいます。

そこで、書写の時間で文字を書くとき、

2 相手に伝える工夫

字形を整えて書くということに加え、目的や相手に応じた伝える工夫も、ぜひ、日常につなげていきたいものです。具体的には、次のような内容が考えられます。

- ① 用紙の選択
用途に合った用紙（模造紙・画用紙・ノート・メモ用紙・はがき等）を選択する。
- ② 用具の選択
目的に合った用具（鉛筆・ボールペン・フェルトペン・毛筆・カラーペン等）を選択する。
- ③ レイアウト
用紙全体との関係に注意し、文章や図・グラフ・写真等を配置する。
- ④ 文章表現力（国語科）
目的や相手に合わせて表現や説明のしかたを工夫し、分かりやすく伝える。

これらについては、「壁新聞を作る」「礼状を書く」「招待状を作る」「本の紹介カードを作る」など、具体的な言語活動の中で指導するほうが効果的であるため、国

語をはじめとした他教科との関連が求められます。

各学年の教科書巻末の「資料」には、手紙・はがき・原稿用紙・新聞・ノートなど、子どもたちが日常の学習や生活で生かすことができるさまざまな書式が掲載されています。他教科でこれらに関連した言語活動を行う際には、書写の教科書を取り出し、手元に置いて活用させたものです。

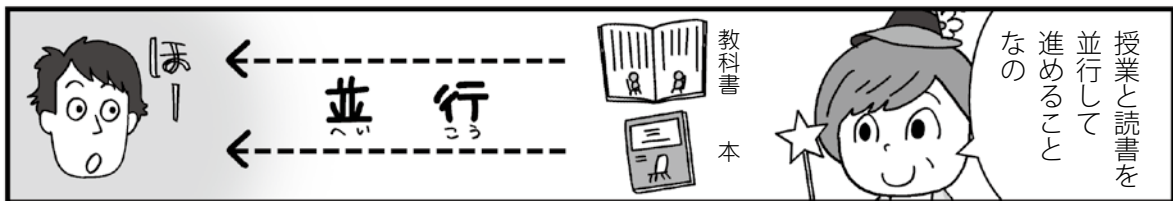
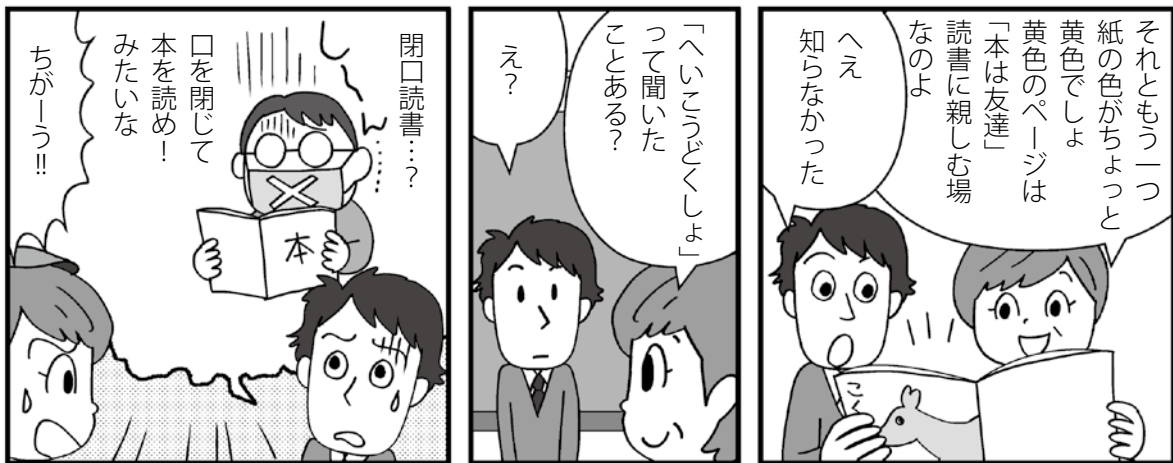
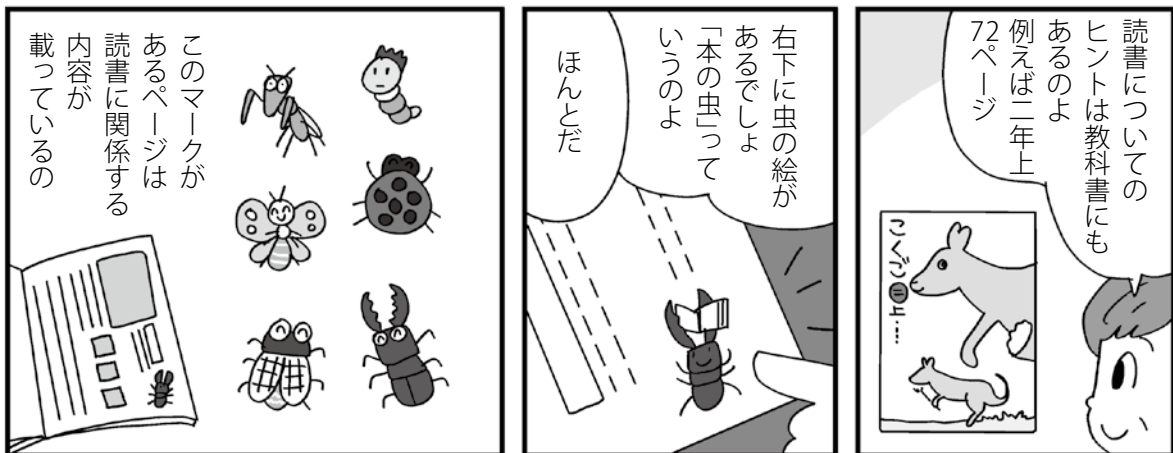
3 おわりに

書写の時間で学習したことは、全ての教科の学習に活用することができます。書写での既習事項を模造紙などに書き出して教室内に掲示し、書写と他教科の学習とをつなげるような環境作りを、折に触れてぜひ工夫してみてください。

六回にわたって連載してきた「子どもたちを『書写好き』に」は、今回が最終回です。小さな実践やささやかな提案ばかりで汗顔しきりではありますが、少しでも、先生方が書写の授業をつくる際のヒントにいただければ幸いです。

ご愛読、ありがとうございました。

こしみず・かおり
 広島県生まれ。玉川大学教師教育リサーチセンター客員教授。23年の教員生活の後、港区教育委員会指導主事、東京都教育庁主任指導主事、小学校校長等を経て、現職。光村図書小学校『国語』教科書の編集委員を務める。



なるほど国語指導

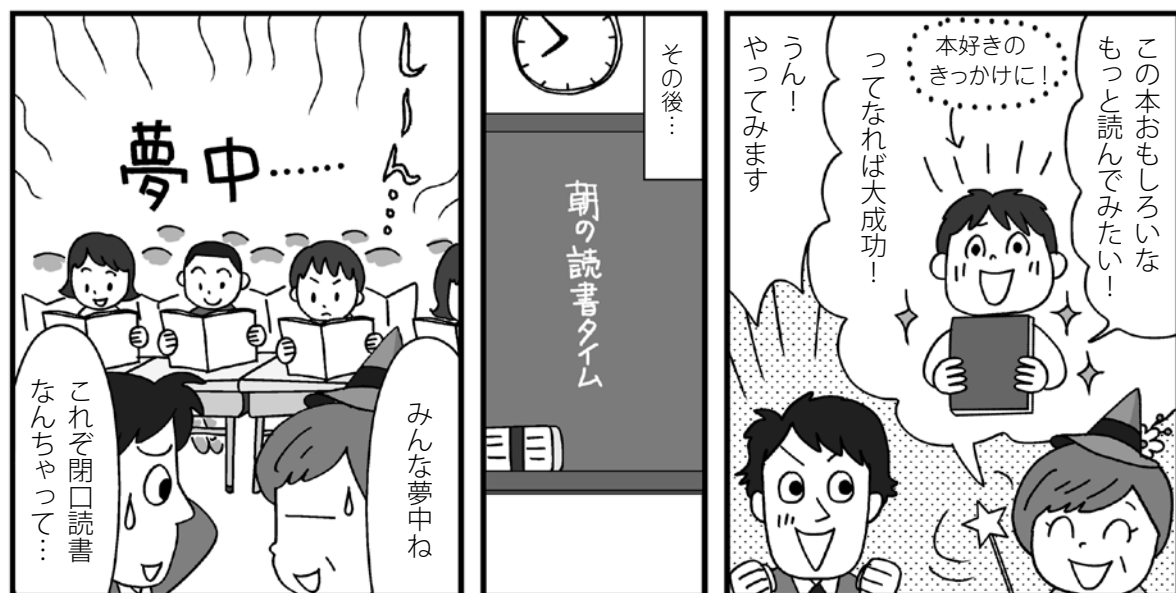
妖精コッシーが教えます 5

楽しい読書で言葉の力を

作・画／あべかよこ 監修／興水かおり



図書館司書とは
自治体や学校の
図書館などに勤務し
おすめの本を
紹介してくれる人。
本の貸し出しや管理、
選書、学習支援などが
主なお仕事(資格が必要)。



読書は、時間や空間を飛び越えて、子どもたちを知的冒険の旅にいざないます。磨き抜かれた表現は、確かに豊かな言葉の力につながります。楽しく、力のつく読書環境を意図的に！（コッシー）

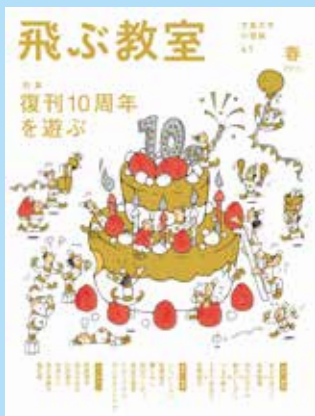
児童文学の冒険

飛ぶ教室

年4回(1・4・7・10月25日)発行

2015年度は、
復刊10周年
year!

「飛ぶ教室」は、石森延男、今江祥智、尾崎秀樹、河合隼雄、栗原一登、阪田寛夫各氏が編集委員となり、子どもと本と子どもの文化を掘り下げる総合誌をめざして、一九八一年に発刊した児童文学雑誌です。



■第41号(2015春) 特集「復刊10周年を遊ぶ」

定価：本体1,000円＋税
ISBN978-4-89528-896-5

2015年の春、「飛ぶ教室」復刊10周年を迎えました。41号は、作家・著名人70名が集う“復刊10周年記念号”です。「さんばつやきょうこさん」ポストカード付き！



■第42号(2015夏) 【編集長シリーズ 第1弾】 特集「五味太郎編集号」

定価：本体1,000円＋税
ISBN978-4-89528-897-2

常に魅力的な絵本を世に出し続ける絵本作家・五味太郎。そんな五味さんが、「飛ぶ教室」の編集長になりました。五味編集長による極上の“遊び”の42号です。



■第43号(2015秋) 【編集長シリーズ 第2弾】 特集「幅允孝編集号 ブックガイド 本と、その先。」

定価：本体1,000円＋税
ISBN978-4-89528-949-8

人が本と出会うための新しい環境づくりを提案する、ブックディレクター・幅允孝。幅編集長による、読書が閉じたもので終わらないためのブックガイドです。



■第44号(2016冬) 【編集長シリーズ 第3弾】 特集「金原瑞人編集号 えっ、詩？ いや、短歌！ それとも俳句？」

定価：本体1,000円＋税
ISBN978-4-89528-950-4

翻訳家・金原瑞人が編集長として選んだテーマは、なんと詩、短歌、俳句！ これからおもしろくする新しい詩、短歌、俳句に、金原流のスポットを当てます。

- バックナンバーの詳しい内容は、
光村図書ウェブサイトをご覧ください。
www.mitsumura-tosho.co.jp
- ご注文は、お近くの書店、または
オンライン書店でどうぞ。

『小学校国語 授業に役立つワークシート集 6年』 訂正のお知らせ

平成27年度版『小学校国語 授業に役立つワークシート集 6年』87ページ①の②に、空欄に漢字を入れて「土農工商」の熟語とする設問がございます。しかしながら、現行の社会科教科書では、この用語は使用されておりません。そのため、当該の設問を「古□東□(古今東西)」に訂正いたします。この設問は、教科書6年「熟語の成り立ち」(9月教材)に対応したものでございます。来年度以降のご指導の際には、ご注意くださいようお願い申し上げます。

2 熟語の成り立ち	
① □の中に漢字を書いて四字の熟語を完成させましょう。	① 花 □ □ □ □
② 思いつく四字以上の熟語を書きましょう。	② 古 □ □ □ □
③ 四字以上の熟語を作ってみましょう。	③ 起 □ □ □ □
	④ 結 □ □ □ □
	⑤ 東 □ □ □ □
	⑥ 風 □ □ □ □
	⑦ 約 □ □ □ □
	⑧ 約 □ □ □ □
	⑨ 動 □ □ □ □
	⑩ 動 □ □ □ □

社会科の教科書を参考に見よう。

広報課便り

「情報化社会における授業づくり」と題して、情報の理解・表現、メディア・リテラシーについて考えた今号の特集は、いかがだったでしょうか。

インタビューでお話を伺った、ジャーナリストの下村健一さんは、さまざまな場でメディア・リテラシーに関する講演や授業をなさっています。「メディア・リテラシー 授業のポイント」(P11)では、そんなご経験の中から、メディア・リテラシーについて、子どもたちに分かりやすく伝えるための工夫をいくつかご紹介いただきました。

「想像力のスイッチを入れよう」(5年)の学習に限らず、日常のさまざまな機会に子どもたちとメディア・リテラシーについて考えるときに、ぜひご活用ください。